

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(31)特許出願公開番号

特開平6-261332

(43)公開日 平成6年(1994)9月18日

(51)Int CL<sup>5</sup>

識別記号

片内整理番号

F I

技術表示箇所

H 0 4 N 9/64

Z 8942-5C

審査請求 未請求 請求項の数 3 O L (全 7 頁)

(21)出願番号	特願平5-42817	(71)出願人	000004352 日本放送協会 東京都渋谷区神南2丁目2番1号
(22)出願日	平成5年(1993)2月3日	(72)発明者	金澤 勝 東京都世田谷区益1丁目10番11号 日本放送協会放送技術研究所内
		(73)発明者	飯田 純二 東京都世田谷区益1丁目10番11号 日本放送協会放送技術研究所内
		(74)代理人	弁理士 杉村 親秀 (外5名)

(54)【発明の名称】 多原色表示用原色変換方法

(57)【要約】

【目的】 カラーテレビジョン伝送方式において、3原色表示用の信号を3原色を越える多原色表示用の信号に簡単な方法で変換する。

【構成】 伝送された3原色R、G、B信号が色度図上いかなる位置にあるかを判定し、その結果により変換される3原色を越える多原色の中から3つの色を選び、公知の方法でそれらの1次結合を作成したり、変換される3原色を越える多原色信号を3原色R、G、B信号の1次結合としてすべて計算して出力し、このとき、多原色の中から3つの色を選択し、それ以外の色の出力が負になる時にはその出力を零にするとともに補正信号を用意し、前記選択された3つの原色の1次結合の出力にその補正信号を加算して出力するように構成する。

1

【特許請求の範囲】

【請求項1】 伝送されてきたカラーテレビジョン信号の輝度信号Yと2つの色差信号C、およびC、を、逆マトリクス回路を介して3原色信号R、G及びBに変換し、変換により得られた3原色信号R、GおよびBが色度図上いかなる位置にあるかを判定し、その判定結果に基づき則に色度図上で選んだ3原色を越える多原色の中から3つの原色を選択し、これらの1次結合により入力色信号を表現し、受信側での多原色表示に備えるようにしたことを特徴とする多原色表示用原色変換方法。

【請求項2】 伝送されてきたカラーテレビジョン信号の輝度信号Yと2つの色差信号C、およびC、を、逆マトリクス回路を介して3原色信号R、GおよびBに変換し、受信側で別に色度図上で選んだ3原色を越える多原色信号をそれぞれ前記3原色信号R、GおよびBの1次結合として計算して出力し、前記3原色を越える多原色の中から3つの原色を選択し、それ以外の原色の前記1次結合の出力が負になる時にはその出力を零にするとともに補正信号を用い、前記選択された3つの原色の前記1次結合の出力にその補正信号を加算して出力し、受信側での多原色表示に備えるようにしたことを特徴とする多原色表示用原色変換方法。

【請求項3】 前記カラーテレビジョン信号が受信側表示装置のガンマ補正をあらかじめ逆ガンマ補正されて伝送される場合には、原色変換に先立ち3原色信号R、GおよびBをそれぞれガンマ補正し、出力多原色信号を逆ガンマ補正することを特徴とする請求項1または2記載の多原色表示用原色変換方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】 この発明は、テレビジョン信号を表示するための信号処理回路に係り、特に簡易な1次結合と負信号のクリップとを用いて3原色方式になるカラーテレビジョン信号を多原色表示用の信号へ変換する原色変換方法に関するものである。

【0002】

【従来の技術】 現行のカラーテレビジョン伝送方式あるいはその表示装置においては、3原色からの伝送あるいは3原色にもついても表示が実用化されており、3原色を越える多原色表示の従来技術は存在しなかった。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】 例えは現行のカラーテレビジョン伝送方式は3つの原色点、即ち赤（R）、緑（G）および青（B）から成り立っている。x-y色度図上にこれらの原色点を表示すると例えは図7のようになる。現行の標準方式は図7の3角形RGBの外側にある色も表現することが可能であり、任意の色を3原色点R、GおよびBの信号レベル、gおよびbにより表現すれば、点aはrの値が負になる色である。

【0004】 しかし受信機側においてはレベルが負の値

(2)

特開平6-261332

2

に相当する発光色は存在しないため、3原色点が受信側と送信側とで等しいれば、色度図上の点aのような3角形の外側に位置する色は正しく再現できないことになる。これを改善する方法として次の2つの方法が考えられる。

(i) 受信機側で彩度の高い色を3原色点とする。  
(ii) 彩度の高い色を加えて、より多原色の受信機とする。

(i)の方法で広い色範囲を再現しようとする、非常に彩度の高い色を用いる必要がある。通常彩度の高い色は輝度が低いことから(ii)の方法の方が実用上有利である。

【0005】 一例として図8のような6原色表示を考える。新しい原色はO、P、Q、S、T、Uである。6原色を考えたのは、現行の表示が3原色なので、これの2倍とすることが実用上容易と考えられるからである。6原色各色の信号レベルがそれぞれ、p、q、r、s、t、uである色を、3原色システムで表現したときに3原色各色の信号レベルがそれぞれ、g、bであるならば、R、G、E、P、Q、S、T、Uを1×3のマトリクスとして（素素光の3割減速）、式(1)が成立する。

【数1】

$$0 \cdot O + p \cdot P + q \cdot Q + r \cdot R + s \cdot S + t \cdot T + u \cdot U = r \cdot R + g \cdot G + b \cdot B \quad (1)$$

式(1)は6元3連立方程式であるから何らかの条件を付加しなければ解くことはできない。

【0006】 そこで本発明の目的は、伝送されてきた3原色方式になるカラーテレビジョン信号を多原色表示用の信号に変換して、彩度の高い色も正確に再現することの可能な、より具体的に前述の式(1)のうちの6元3連立方程式を解くことの可能な多原色表示用原色変換方法を提供せんとするものである。

【0007】

【詳細を解決するための手段】 その目的を達成するため、本発明多原色表示用原色変換方法になる第1の発明は、伝送されてきたカラーテレビジョン信号の輝度信号Yと2つの色差信号C、およびC、を、逆マトリクス回路を介して3原色信号R、G及びBに変換し、変換により得られた3原色信号R、GおよびBが色度図上いかなる位置にあるかを判定し、その判定結果に基づき別に色度図上で選んだ3原色を越える多原色の中から3つの原色を選択し、これらの1次結合により入力色信号を表現し、受信側での多原色表示に備えるようにしたことを特徴とするものである。

【0008】 またその第2の発明は、伝送されてきたカラーテレビジョン信号の輝度信号Yと2つの色差信号C、およびC、を、逆マトリクス回路を介して3原色信号R、GおよびBに変換し、受信側で別に色度図上で選んだ3原色を越える多原色信号をそれぞれ前記3原色信号

(3)

特開平6-261332

4

R、GおよびBの1次結合として計算して出力し、例記3原色を超える多原色の中から3つの原色を選択し、それ以外の原色の例記1次結合の出力が負になる時にはその出力を零にするとともに補正信号を用い、前記選択された3つの原色の例記1次結合の出力にその補正信号を加算して出力し、受信側での多原色を表示に備えるようにしたことを特徴とするものである。

【0009】

【実施例】以下図面を参照し実施例により本発明を詳細に説明する。まず伝送された3原色方式になるカラーテレビジョン信号の輝度信号Yおよび2つの色差信号C、C<sub>2</sub>は通常の逆マトリクス回路により3原色信号R、G及びBに変換される。この3原色信号をその入力の色に応じて、画素毎に、受信側にて3原色以上の原色点間で原色点を切り替える方法が本発明の第1の実明である。

【0010】図2に6原色表示で、うち3原色の組合せで表示の可能な4つの領域(3角形OPQ、PSQ、T OQ、T Q U)に色範囲を分けた第1の実施例である。例えば入力色信号が色度図上3角形OPQの範囲にある

ならば、式(1)に於いて $s=t=u=0.0$ とした時

$$K_1 \cdot r + K_2 \cdot g + K_3 \cdot b = 0$$

より係数 $K_1$ 、 $K_2$ 、 $K_3$ を定め、これらの係数を入力色信号の $r$ 、 $g$ 、 $b$ 成分にそれぞれ乗じてそれらの1次結合をとり、結合の結果の正負により判定を行うものである。この判定のハード構成は図3のような構成で、図3の構成はとりもたず図1図示判定路1の中味である。

【0013】すなわち図3において信号 $r$ 、 $g$ 、 $b$ は入力テレビジョン信号のR、G及びB成分にガンマ係数を乗じて得た信号、係数 $K_1$ 、 $K_2$ 、 $K_3$ の係数の値は、図2図示色度図上で例えば直線PQに対していずれの側に入力色信号が得るかを判定するための原色係数群。同様に係数 $K_1$ 、 $K_2$ 、 $K_3$ の係数の値および係数 $K_1$ 、 $K_2$ 、 $K_3$  ※

$$0 \cdot t = u = 0.0$$

$$P \cdot P + q \cdot Q + s \cdot S = r \cdot R + g \cdot G + b \cdot B \quad (3)$$

で決まる係数になる。

【0016】(b)入力の色が直線PQの右で直線OQの時の時

$$s=t=u=0.0$$

$$0 \cdot O + p \cdot P + q \cdot Q = r \cdot R + g \cdot G + b \cdot B \quad (4)$$

で決まる係数になる。

【0017】(c)入力の色が直線OQの下で直線QTの時の時

$$p=s=u=0.0$$

$$0 \cdot O + q \cdot Q + t \cdot T = r \cdot R + g \cdot G + b \cdot B \quad (5)$$

で決まる係数になる。

【0018】(d)入力の色が直線QTの下の時

$$0 \cdot p = s = u = 0.0$$

$$t \cdot T + q \cdot Q + u \cdot U = r \cdot R + g \cdot G + b \cdot B \quad (6)$$

\*  $0$ 、 $q$ 及び $q > 0.0$ という群が得られるので正副色再現が行われる。 $r$ 、 $g$ 、 $b$ から $0$ 、 $p$ 、 $q$ 、 $s$ 、 $t$ 、 $u$ への変換は、図1図示のハードウェアの構成で実施することができる。

【0011】図1で3原色R、G及びB信号の入力レベルが $r$ 、 $g$ 、 $b$ とあるのは、表示側の表示装置のガンマ特性が補正された色信号のR、G、Bの色成分を示すもので、ガンマ特性 $\gamma$ でその補正を戻し、原色変換を行った後表示装置へ出力する前にガンマ特性補正をしている。判定路1は入力された色信号が色度図上、例えば $x$ 、 $y$ 色度図上いかなる位置にあるか、例えば先に示した4つの3角形領域のどの領域にあるかを判定するもので、その判定の結果により図に並んだ3つの係数群 $K$ の組(6組)のどの組を使用するか使わないかを選択する。

【0012】色度図上において、任意の色が与えられた直線のどちら側にあるかは、例えば図2図示 $x$ 、 $y$ 色度図上において直線PQの左にあるのか右にあるのかを調べるために、色度図上直線PQを表示する式(2)

【数2】

(2)

※の係数の値は直線OQおよびQTに対するもの、今の場合係数 $K_1$ 、 $K_2$ 、 $K_3$ の係数の値は異なる値としないこととなる。

【0014】これら係数の値の各要素出力の1次結合はその正、負により判定路2〜5で0又は1と判定され、それら出力は図1図示の係数選択 $K$ を動作させたり動作させなかったりして、より具体的には以下(a)から

(d)に示す動作をする。

【0015】(a)入力の色が直線PQの左の時3角形PSQと判断し、係数群 $K_1$ は

【数3】

★3角形OPQと判断し、係数群 $K_1$ は

【数4】

☆3角形OQTと判断し、係数群 $K_1$ は

【数5】

◆3角形TQUと判断し、係数群 $K_1$ は

【数6】

5

で決まる係数になる。

【0019】次に本特許第2の発明に係る第2の実施例について説明する。図4にその第2の実施例の構成を示す。第1の実施例は入力の色に対応して1画素ごとに係数 $k$ を取り変えるためハードウェアの規模が大きくなるが、図4では係数を一定としているためハードウェアの規模は小さい。この構成では、六角形OPQRSTのなる一部の色が完全には再現されない場合もあるが、実用上全く問題はない。

【0020】この図で、黒クリップ及び反転出力 $N$ 。 \*10

$$o \cdot O + p \cdot P + q \cdot Q = r \cdot R + g \cdot G + b \cdot B - c \cdot S - t \cdot T - u \cdot U$$

【0023】 $s, t, u$ を単純に $r, g, b$ の1次結合で表現すると、式(7)の制約により、原理的には $o, p, q, s, t, u$ すべての値が0または正で表現できる。図4の六角形OPQRSTの内側の多くの色に対して、どれかの値が負になる。従って、正しい色再現ができな。図4ではこれを改善するため、黒クリップ及び反転出力 $N, C$ を用いている。この図解は、 $s, t, u$ が負の時は“0”を出力しその補正項を $o, p, q$ に加えるもので、上記の問題を大幅に改善できる。

【0024】なおこの係数 $k$ の算数は、六角形OPQRST内部のほとんどの色に対して $o, p, q, s, t, u$

$$\begin{aligned} R(0.399, 0.212, 0.019), G(0.365, 0.701, 0.112), B(0.192, 0.087, 0.950), \\ O(0.640, 0.350, 0.000), P(0.332, 0.620, 0.048), Q(0.153, 0.024, 0.823), \\ S(0.028, 0.398, 0.574), T(0.705, 0.295, 0.009), U(0.169, 0.697, 0.824) \end{aligned}$$

(8)

【0027】式(8)で得る原色は色の三刺激値 $X, Y, Z$ で表示され、 $x, y$ 色度図上で示せば図6のようになる。

【0028】入力された色 $r, g, b$ に対して、実施例1(図1)では、以下のように領域判定された信号レベル★

$$\begin{aligned} o &= t = u = 0.0 \\ p &= 0.9523 \cdot r + 1.0837 \cdot g + 0.0568 \cdot b \\ q &= 0.6681 \cdot r + 0.0226 \cdot g + 1.1382 \cdot b \\ s &= -1.0557 \cdot r + 0.0719 \cdot g + 0.0617 \cdot b \end{aligned} \quad (9)$$

【0029】(b)  $-0.7949 \cdot r + 0.0569 \cdot g + 0.0487 \cdot b > 0.0$  のとき  
 $b < 0.0$  かつ  $-0.0082 \cdot r + 0.5452 \cdot g + 0.0552 \cdot b > 0$  ★

$$\begin{aligned} s &= t = u = 0.0 \\ o &= 0.6832 \cdot r - 0.0442 \cdot g - 0.0378 \cdot b \\ p &= -0.0873 \cdot r + 1.1538 \cdot g + 0.1168 \cdot b \\ q &= 0.6238 \cdot r + 0.0687 \cdot g + 1.1577 \cdot b \end{aligned} \quad (10)$$

【0030】(c)  $-0.0082 \cdot r + 0.5452 \cdot g + 0.0552 \cdot b > 0$  のとき  
 $b < 0.0$  かつ  $0.0511 \cdot r + 0.5820 \cdot g + 0.0557 \cdot b > 0$  ★

$$\begin{aligned} p &= s = u = 0.0 \\ o &= 0.5274 \cdot r + 0.0051 \cdot g + 0.5745 \cdot b \\ q &= 0.0228 \cdot r + 0.1309 \cdot g + 1.1645 \cdot b \\ t &= 0.6745 \cdot r - 0.9629 \cdot g - 0.5023 \cdot b \end{aligned} \quad (11)$$

【0031】(d)  $0.0511 \cdot r + 0.5820 \cdot g + 0.0557 \cdot b > 0$  のとき

(4)

特開平6-261332

6

\*C. は以下の働きをするものである。すなわち入力 $x$ (図の左側)が正の時、右側に“ $x$ ”を出力し、下には“0”を出力する。

【0021】入力 $x$ が負の時、右側に“0”を出力し、下には“ $x$ ”を出力する。

【0022】以下に図4の原理的な動作を説明する。式(1)は、式(7)と変形できければ $s, t, u$ を係数変数として未知数が $o, p, q$ の3元3連立方程式である。

【数7】

$$(7)$$

\*1.  $u$ すべての値が0または正になるようにあらかじめ計算で決めておく。

【0025】また図5は、図4を4原色へ応用した場合のハード構成を示している。

【0026】次に本願発明をより具体的に説明するために、 $R, G, B, O, P, Q, S, T, U$ に具体的に色度図上の座標を与えて図1と図4のハード構成の説明をする。例として、以下の色度図の場合について考察する。

【数8】

★が計算される。

(a)  $-0.7949 \cdot r + 0.0569 \cdot g + 0.0487 \cdot b > 0.0$  のとき

【数9】

★ $> 0.0$  のとき

【数10】

★ $> 0.0$  のとき

【数11】

【数12】

$$50 \quad o = p = s = 0.0$$

(5) 待機平6=261332

7 8

$q = 2.0835 \cdot r + 23.579 \cdot g + 3.4070 \cdot b$  \* 0.  $x < 0.0$   
 $t = 0.5994 \cdot r + 1.0138 \cdot g + 0.0694 \cdot b$   $g(x) = 0$ ,  $x > 0.0$   
 $u = -2.0562 \cdot r - 23.414 \cdot b - 2.2398 \cdot b$   $x \cdot x < 0.0$

【0032】実施例2（図4）では、以下の計算が行われる。

【数13】

$f(x) = x$ ,  $x > 0.0$  \* としたとき  
 $o = -0.2972 \cdot r + 2.3798 \cdot g + 0.4522 \cdot b - 0.6147 \cdot g \cdot (s_1)$   
 $+ 1.2189 \cdot g \cdot (t_1) + 0.0547 \cdot g \cdot (u_1)$   
 $p = 0.9378 \cdot r + 0.5533 \cdot g - 0.1118 \cdot b + 0.9741 \cdot g \cdot (s_1)$   
 $- 0.2325 \cdot g \cdot (t_1) - 0.0593 \cdot g \cdot (u_1)$   
 $q = 0.7335 \cdot r + 1.4264 \cdot g + 0.3273 \cdot b + 0.6406 \cdot g \cdot (s_1)$   
 $+ 0.0836 \cdot g \cdot (t_1) + 1.0047 \cdot g \cdot (u_1)$   
 $s = f(s_1)$   
 $t = f(t_1)$   
 $u = f(u_1)$  (13)

【0033】いくつかの色サンプルについて、(9)～ (13)式がどのような値を生じるのかを説明する。

(e)  $r = -0.5$ ,  $g = 1.0$ ,  $b = 1.0$  は場合（図6のC1） \* 20 【数14】  
 $o = 0.0$ ,  $p = 0.659$ ,  $q = 0.807$ ,  $s = 0.637$ ,  $t = 0.0$ ,  $u = 0.0$  (14)

【0035】実施例2では、 $s_1 = 0.740$ ,  $t_1 = -2.36$  ★ 【数15】  
 7.  $u = -0.637$  より  
 $o = 0.062$ ,  $p = 0.559$ ,  $q = 0.741$ ,  $s = 0.749$ ,  $t = 0.0$ ,  $u = 0.0$  (15)

(f)  $r = 1.0$ ,  $g = 1.0$ ,  $b = 1.0$  の場合（図6のC2） ☆  $-0.0082 \cdot r + 0.5452 \cdot g + 0.0552 \cdot b = 0.592 > 0.0$  となるため (b) と判定され式(10)より  
 【数16】  
 $0.0487 \cdot b = -0.689 < 0.0$  ☆30  
 $o = 0.536$ ,  $p = 1.253$ ,  $q = 1.250$ ,  $s = 0.0$ ,  $t = 0.0$ ,  $u = 0.0$  (16)

【0037】実施例2では、 $s_1 = -0.638$ ,  $t_1 = -1.1$  ◆ 【数17】  
 925.  $u = -0.799$  より  
 $o = 0.536$ ,  $p = 1.253$ ,  $q = 1.250$ ,  $s = 0.0$ ,  $t = 0.0$ ,  $u = 0.0$  (17)

(g)  $r = 1.0$ ,  $g = -0.05$ ,  $b = 1.0$  の場合（図6のC3） \*  $0.0511 \cdot r + 0.5820 \cdot g + 0.0557 \cdot b = 0.028 > 0.0$  となるため (c) と判定され式(11)より  
 【数18】  
 $0.0552 \cdot b = -0.030 < 0.0$  \*40  
 $o = 0.285$ ,  $p = 0.0$ ,  $q = 0.132$ ,  $s = 0.0$ ,  $t = 0.272$ ,  $u = 0.0$  (18)

【0038】実施例2では、 $s_1 = -0.993$ ,  $t_1 = 0.35$  ※ 【数19】  
 5.  $u = 0.015$  より  
 $o = 0.184$ ,  $p = 0.020$ ,  $q = 0.117$ ,  $s = 0.0$ ,  $t = 0.355$ ,  $u = 0.015$  (19)

(h)  $r = 0.2$ ,  $g = -0.14$ ,  $b = 1.0$  の場合（図6のC4） \*  $0.0557 \cdot b = -0.016 < 0.0$  となるため (d) と判定され式(12)より  
 【数20】  
 【0040】実施例1では  $0.0511 \cdot r + 0.5820 \cdot g + 0.0557 \cdot b = 0.0$ ,  $p = 0.0$ ,  $q = 0.522$ ,  $s = 0.0$ ,  $t = 0.047$ ,  $u = 0.627$

9

(5)

轉開平 6-261332

(20)

10

【0041】実施例2では  $s_1 = 0.003$ ,  $t_1 = -0.01$  \*【表21】

1.  $y = 0.773$  点の

5

$$o = 0.046, \quad p = 0.001, \quad q = 0.274, \quad s = 0.003, \quad t = 0.9, \quad u = 0.773$$

(21)

【0042】この例で示したように、本発明は3角形RGBの外側の色でも3原色信号を多原色信号へ変換することができる。

【0043】以上実施例により本願発明を詳細に説明してきたが、本願発明はこれに限定されることなく、各種の変形、変更の可能なことは当業者にとり自明である。

[0044]

【発明の効果】本発明原色変換方法によれば、3原色方式になるカラーテレビジョン信号の色信号でx y 色度図上3原色R、G及びBの3原色点が作る三角形外の色度点の色も正確に再現することができ、彩度の高い色も正しく表示され、しかもその変換方法を構成するハード構成も比較的簡単な有利点を有する。

【図面の簡単な説明】

※【図1】本発明第1の実施例のハード構成例

【図2】6 颜色表示で色度図上領域分割の例

【図3】第1の実施例判定器1の構成例

【図4】本発明第2の実施例のリーフ部

【図6】本発明の他の実施例（4 要素）の概

【図6】各原料をこの各成分の人の量比例

【図6】6 色色表示の色度図上の具体例

【図 7】 三度角を用いた現行標準方式の表示

【図8】6原色表示の色度図上の例

【符号の説明】

## 1~5 确定型

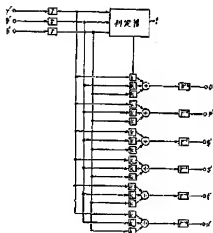
γ ガンマ線正

 $\gamma^{-1}$  逆力

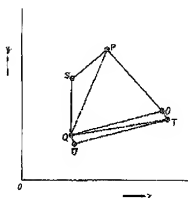
k 係數圖

※25 N.C. 負クリップ及び反転出力

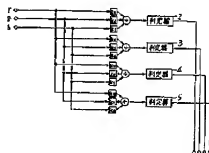
【圖 1】



【圖2】



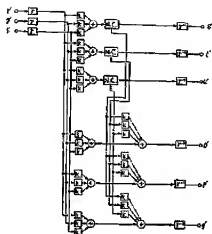
【圖3】



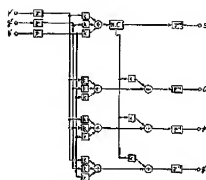
(7)

特開平6-261332

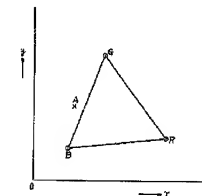
〔図4〕



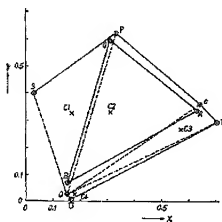
〔図5〕



〔図7〕



〔図6〕



〔図8〕

